

カウンセリングルームだより

Vol. 40 (2013年4月発行)



不妊治療助成、見直しへ

対象年齢・回数制限も

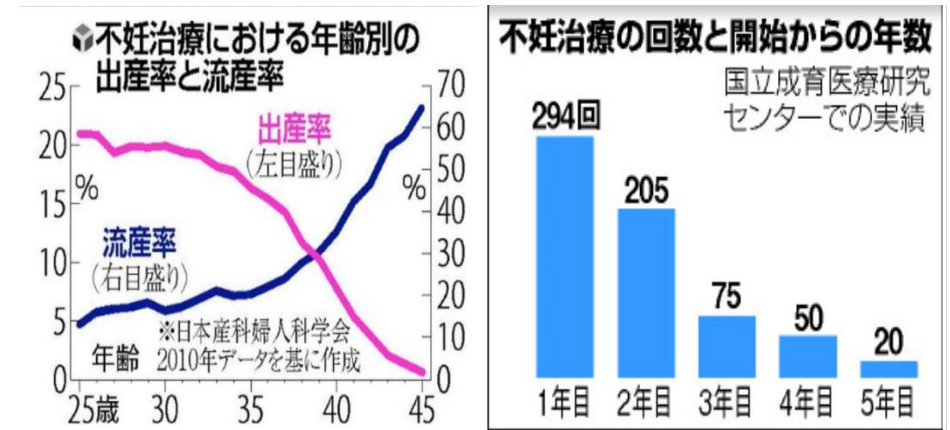
少子化対策の一環で 2004 年に始まった事業で、現在は年収 730 万円までの夫婦を対象に、1 回あたり最大 15 万円を助成、回数は 5 年間で 10 回まで。1 年目は 3 回まで、2 年目以降は年 2 回までと制限はあるものの年齢制限はない。助成件数は 04 年度は 1 万 7 千件だったが、その後の対象拡大もあり 07 年度は 6 万件、11 年度は 11 万件と増え、費用は国と自治体で約 200 億以上に上る。年齢が高いほど妊娠しにくくなる傾向があり、厚労省は近く検討会を設け、効果的な助成のあり方を検討するという。

厚労省研究班の分析では、不妊治療で赤ちゃんを授かる割合は 32 歳までは 20% でほぼ横ばいだが、36 歳ごろから急に下がり、40 歳では 8% になる。流産のリスクも年齢と共に上がる。一方で、治療を受ける人の年齢も上がり、40 歳以上が占める率は 07 年が 31%、10 年が 36% だった。

研究班は 3 月「助成に年齢制限を設ける場合、39 歳以下が望ましい」とする報告をまとめた。妊娠した人の多くは治療開始後の早い時期であることから、2 年間で 6 回と集中的に治療できるような助成にするよう提言した。

厚労省は検討会で、患者団体も交え、どのような助成が適切か条

件を話し合う。所得制限や、年齢と妊娠の知識の普及、移行措置も含めて詰め、早ければ来年度から反映させる。



(朝日新聞 2013 年 4 月 10 日記事より)

世界初の体外受精児を誕生させ、ノーベル医学生理学賞を受賞したロバート・エドワード英ケンブリッジ大名誉教授が 4 月 10 日死去 87 歳だった。病気で長く療養していたという。

エドワーズ氏は、産婦人科医の故パトリック・ステプター氏と共に、体外受精の技術を確立。1978 年、ルイズ・ブラウンさんを誕生させた。当時は「試験管ベビー」と呼ばれ、生命の誕生に人が手を加えることの是非は大論争になったが、現在は一般的な医療として定着。2010 年にはノーベル医学生理学賞を受賞した。

体外受精ではこれまでに世界で 400 万人が誕生。日本でも体外受精や顕微授精などの不妊治療で 2010 年だけで 2 万 8 千人が誕生している。

(朝日新聞 2013 年 4 月 11 日記事より)

カウンセリングは毎週土曜日に実施しています。治療方針で悩んだり、治療に疲れた時には是非ご利用してください。ご予約は受け付けまで。